

2024 年度 聖学院大学

学校推薦型選抜 指定校制推薦 1 期入学試験 口頭試問課題文

◇以下の課題文について、簡潔に内容を説明できるようにしておいてください。また、課題文の内容に関して、共感したところ、共感できないところ、気がついたこと、疑問に思ったこと等について質問するので、答えられるようにしておいてください。

学習相談に見る子どもたち

私たちは認知心理学に基づいた学習研究をしていて、その実践活動の一つとして子ども向けの「学習相談室」というのを開いてきました。地域の小・中・高校生に大学に来てもらって、私や学生たちが子どもたちの個別相談や学習指導をします。(中略) 子どもが行動主義のように反復と報酬が大事だという考え方をもってると、物量主義的な学習観になりがちです。要するに、量をこなす。何時間勉強したか、あるいはきょうは問題を何問解いたというように、量だけを気にかけってしまうことになります。一方、認知心理学的な考え方ですと、学習というのは整合的な知識体系をつくっていくことです。それは、単に量をこなせばいいというものではなくて、意味を理解するとか、知識を関連づけるとか、そういう質的なことに注意を向けようという考え方にもなります。

これは課題にもよるので、一概にどちらが正しいということは言えないと思うんですね。何回も反復してだんだんにできるようになっていくタイプの学習もあれば、意味を理解するというのが大切な学習もあるでしょう。だから、最終的には学習者が自分自身の考え方というものをもっと自分で納得いくように洗練されたものにして、自分の学習全体を自分でコントロールできるようになってほしいという思いがあるわけです。ただそのためには、これまでの自分のやってきた勉強法だけがいいのではなくて、いろいろな学習のしかたがある。そういうものを経験してみた上で、自分でもいいと思うものは取り入れていって、自分なりの学習スタイルをつくってほしいというのが、私たち研究会のメンバーの共通した考え方です。

(中略)

勉強法についての議論

実は、私たちの研究会で和田[秀樹:引用者注]さんの本がよく話題になりました。昔の『数学は暗記だ!』とか『受験は要領』などの本(いずれも、ごま書房)を取り上げて議論してい

ます。和田さんの推奨する勉強法というのは、初期の本の「数学は解法を暗記してしまえばよい」というように、認知心理学的な考え方からした時に、すごく引っかかるころがあったわけです。「暗記」というと、普通、意味もわからず丸暗記ということ想定してしまうことが多いので、これは和田さんの意図とは実は違っていたのかもしれませんが、とにかくわからなくても覚え込んでしまえばいいというふうに取れるところがある。(中略)ですから私はいつか一度、激論をしたいと思っていたのです。

その機会をいつかと思っていた時に、『受験勉強は子供を救う』(河出書房新社)という非常に刺激的な本を和田さんが出版しました。受験勉強というのがいかに子どもにとっていいものかという話で、実に挑発的なタイトルですよね。

(中略)

誤解されないように先に言っておきますと、私は、受験勉強というのはけっして全面的に悪いものとは思っていません。むしろ受験勉強ということを通じて自分の学習方法を見直すことができるし、学習内容自体も間違っことを学んでいるわけではないのですから、生かそうと思えば大学でも社会に出てからも生かすことができるものです。受験勉強が問題だとすれば、むしろそこで非常にひずんだ学習観が固着してしまったり、せつかくやったことを後で全然使おうともせずに、遊んでしまうだけの大学生活を送ったり、教養的なものから離れてしまうような社会生活を送ってしまうこと。それは非常にもったいないことです

(中略)

そこで和田さんと対論をして、(中略)『学力危機-受験と教育をめぐる徹底討論』(河出書房新社)という本にしたわけです。その過程で、実際に話をしてみますと、勉強のしかたについての議論というのはけっこう折り合ってしまったというか、お互いに納得できるころが多く出てきました。

(中略)

学習動機の違い

しかし、どうも話が合わないなという感じになってきたのは、(中略) 学習動機の話です。つまり、どうやったらやる気が出るかという話になった時なんですね。

(中略)

基本的には、和田さんはやはり行動主義的な外的報酬が個人的にも好きなのだと思います。和田さんはたとえば昔の受験本の中でも、「受験はなぜ大切か」と、読者に説得するつもりで書いているところがたくさんあります。和田さんが出す例には、いい大学に行くと、「一生涯の賃金がいかに違うか」とか、「女の子にもてるんだ」という話とか、外的報酬がしきりに出てきます。そういう例を出すというのは、本人も納得できるし、一般の人がそういう例で説得されるだろうと思って出していらっしゃるんだと思います。

(中略)

学校教育での動機づけの話について見てみましょう。和田さんは『パワーアップ論』の中で、世界の教育の流れもむしろ行動主義的になっていると言います。(中略) 要するに子どもはもっと外的な報酬を伴わせて、「勉強すれば得である、勉強しないと損をする」ということを学んだほうがよいということだと思います。「ゆとり」とか「子ども中心」とか言っていると、かえって弊害が出てくるというわけです。

これは和田さんの持論だと思うんですけど、「子どもの頃はきちんとした課題を与えたほうがよい」(p108)とされます。「きちんとした」ということは、何をやるべきかがはっきりしていて、正解、不正解も明確な課題のようです。今学校に導入されようとしている総合的な学習のようなものは、和田さんに言わせると非常にあいまいな課題なのでしょう。興味をもったテーマについて追求して発表するなんていうのは、何が正しいか、間違っているか、はっきりしない。そのような課題はあまり子供の時には与えないほうがよい。きちんとした課題で、努力すればそれなりにできるという課題を与えるほうが教育的である、アメリカがそういう方法をとってから少年犯罪は減っている、自殺率も減っているではないかというわけです。さらに、子どもの場合に限らず、大人も内発的な動機づけばかり強調するのはよくない。少なくとも「内発的な動機づけをもてないのならば、外発的な動機を用意するのが賢明だ」(p. 109)というのが、基本的な論点だと思います。

(中略)

日本では1970年代から80年代にかけて、テスト重視で、受験が非常に加熱した時があったわけですね。和田さんの主張から見れば、これは試験でプレッシャーをかけて競争心をあおり、その勝者には学歴や社会的地位という報酬が与えられるという理想的な時期だったのかもしれませんが。では、その時に日本の学校で何が起きたかというところ、ご存知のように校内暴力を中心とした学校病理現象です。勉強ができる子は確かにそういうシステムに乗ることができるのですが、内発的動機付けの高い子は、それなりに試験をゲーム感覚で楽しめるものですし、外発的な子どもたちは、成績が良ければいい大学に入れる、就職も良くなるということで勉強したかもしれない。しかし、どちらにも乗れなかった大量の子どもたちが出たわけです。内発的に勉強をおもしろいと思えないし、競争の中では負けてしまう生徒たちは、一斉に「こんなところに来たくない」ということで、校内暴力や不登校という形で荒れが起きてしまった。その時、自殺者は少なかったかもしれないけれども、学習というものに対して疎外感を味わう子どもがものすごくいたと思うんです。日本ではそういう形で現れたという苦い経験がある以上、試験を強化して、外発的なやり方で、もう一度昔のように勉強させようというのは、私は決して望ましい対応策ではないと思います。

現在の学校の問題は何か

では、私が何が大切だと思っているかと言いますと、けっして純粋な内発だけではないんです。今の学校では内発も外発もうまくいきにくくなっている。つまり、競争心をあおって

とか、いい大学に入れるとか、お小遣いが増えるというプレッシャーがあまり効かなくなっている。(中略) かといって、純粋に内発的に、先生が授業をおもしろくするよう工夫しても、世の中にもっとおもしろいものはたくさんある。30年前だったらテレビゲームもなければ、ビデオもなければ、携帯電話もなかった。その時、学校の勉強とかスポーツとかいうものが、子どもの知的好奇心とかかなり向上心を満たすものになりえた。優秀な子どもたちはそういうものにエネルギーを注げた。ところが、今はほかにも興味をそそるものがたくさんある。先生がせつかく授業をおもしろく工夫しても、なかなか教科の学習のおもしろさが通じないという時代だと思うんですね。

私は、学校は何を考えるべきかという時に、一言で言ってしまうと、もっと実用志向を重視することだと思っています。つまり、今やっている学習そのものが自分の将来の仕事にも役立つし、社会で生活していく上にも役立つし、少なくとも何か自分の可能性を広げるものになるはずだと。単にどこかの大学に受かるとか、あるいはお小遣いが増えるとか、親にほめてもらえるとか、そういう意味での報酬ではなくて、その学習内容自体が大切なことなんだという実感を、子ども自身がもてるようなことを取り上げていく必要があるのではないかと。

そういう意味で、今度小・中・高校に導入される「総合的な学習の時間」にも、私は賛成しています。もちろん、教科の学習というのは、やはりこれからも学校教育の学習の中心ではあると思います。しかし、それだけではなくて、自分が大切だと思うテーマを設定してそれを追求していくような学び方というのが、今よりはもっとたくさん入ってきていいだろう。それが生徒の学習意欲を促すことにもなるだろう。ですから受験というプレッシャーではなくて、内容的な必要感を感じて学ぶということが学校の中に入ってきてもいいのではないかと。

市川伸一，学ぶ意欲の心理学，PHP 研究所